小 学 校

平 成 16 年 度

# 教 育 研 究 員 研 究 報 告 書

道　　徳

東 京 都 教 職 員 研 修 セ ン タ ー

# 目　　次
## 一人一人の心に響く道徳の時間

◇　目　　次 ---------- 1
Ⅰ　1　主題設定の理由 ---------- 2
　　2　研究構想図 ---------- 3

**Ⅱ　低学年分科会** ---------- 4
「様々な考えに出会う中で、自分の思いをもち、よりよく生きようとする児童を育てる道徳の時間」
1　主題設定の理由
2　研究の仮説
3　実態調査
4　研究主題に迫るための手だて
5　実践事例
6　考察

**Ⅲ　中学年分科会Ａ** ---------- 9
「互いのよさに気付き、よりよく生きようとする児童を育てる道徳の時間」
1　主題設定の理由
2　研究の仮説
3　実態調査
4　研究主題に迫るための手だて
5　実践事例
6　考察

**Ⅳ　中学年分科会Ｂ** ---------- １４
「様々な感じ方、考え方と触れ合い、自分の心に向き合うことにより
よりよく生きようとする心を育てる道徳の時間」
1　主題設定の理由
2　研究の仮説
3　実態調査
4　研究主題に迫るための手だて
5　実践事例
6　考察

**Ⅴ　高学年分科会** ---------- １９
「多様な考え方を認め合い、自分を見つめ、心を高めようとする道徳の時間」
1　主題設定の理由
2　研究の仮説
3　実態調査
4　研究主題に迫るための手だて
5　実践事例
6　考察

Ⅵ　研究の成果と課題 ---------- ２４

平成１６年度東京都教育研究員（小学校道徳）

# 研究主題：一人一人の心に響く道徳の時間

## Ⅰ　主題設定の理由

子どもは本来、「よりよく生きたい」と願っている存在である。善や正義を好み、真理を愛し、美しいものを求めようとする心など、道徳性の向上への欲求をもっている。ところが今日、いじめや不登校、学校外での社会体験の不足など子どもたちにとってさまざまな課題がある。このような社会の中で、子どもたちが生きがいをもち、幸せな人生を送るためには、心の豊かさが不可欠である。学校は子どもたちの豊かな心を形成していく場の一つであり、その根本である道徳教育を充実させることが重要である。そして、道徳教育の要である、道徳の時間の充実が一層求められている。

道徳の時間は資料を読んだり、話合いをしたりして自分の生き方を見つめ、よりよい自分にしていこうとする意欲や態度を育成する時間である。そのためには、「一人一人の心に響く」ことが大切である。本研究では、「心に響く」とは子どもの感性が揺り動かされ、心に訴えるものがあり、子ども自身が未来へ向かい生きていこうとする意欲を高めることだと考えた。道徳の時間では、資料に出会う、自分の考えをもつ、友達の意見を聞く、自分を深く見つめるなどの活動の中で心に響くのである。本研究においては、自己理解、他者理解のための工夫をした道徳の時間を積み重ねることにより、子どもたち一人一人の道徳的価値の自覚が深まり、道徳的実践力が高まっていくと考えた。

以上のようなことにより上記研究主題を設定した。

## １　研究の視点

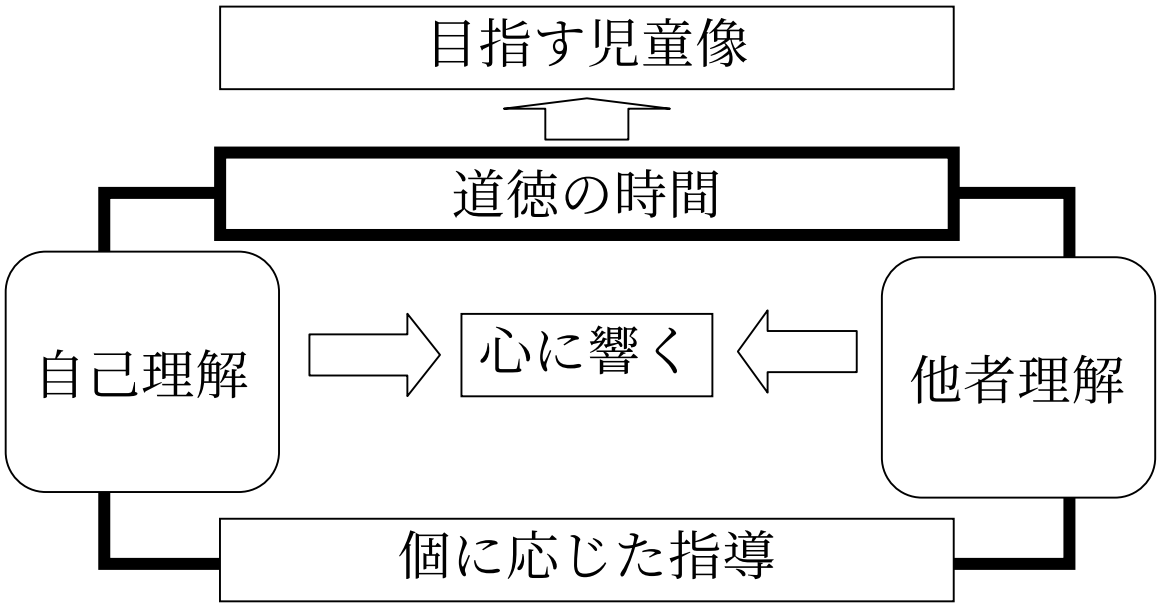
研究を進めるにあたり、次のことを研究の視点とした。

〇道徳的実践力を高めていくために

・自己理解のための工夫　・他者理解のための工夫

〇個に応じた指導をするために

・一人一人の実態に応じたねらいと評価の工夫



| 共通主題 | 個に応じた指導の一層の充実<br>（　一人一人の心に響く道徳の時間　） |
|---|---|

| 低学年分科会 | 中学年Ａ分科会 | 中学年Ｂ分科会 | 高学年分科会 |
|---|---|---|---|
| **目指す児童像** | | | |
| ・自分の思いがもてる児童<br>・友達の考えが聞ける児童 | ・自分を見つめる児童<br>・友達のよさに気付く児童 | ・自分の思いを見つめる児童<br>・互いの思いに気付く児童 | ・自分のよさがわかり、より高めようとする児童<br>・友達のよさを自分にも生かそうとする児童 |
| **分科会主題** | | | |
| 様々な考えに出会う中で、自分の思いをもち、よりよく生活しようとする児童を育てる道徳の時間 | 互いのよさに気付き、よりよく生きようとする児童を育てる道徳の時間 | 様々な感じ方、考え方と触れ合い、自分の心に向き合うことにより、よりよく生きようとする心を育てる道徳の時間 | 多様な考え方を認め合い、自分を見つめ、心を高めようとする道徳の時間 |
| **研　究　仮　説** | | | |
| ・児童の心を打つ資料などを使って、発問を吟味すれば、自分の思いがもてるようになるだろう。<br>・相互に思いを伝える話合いを展開すれば、友達の考えを聞き合うようになるだろう。 | ・これまでの自分を振り返りこれからの自分の生き方を見つめられるような資料を選択し発問をすれば、児童は自分のことを見つめるであろう。<br>・児童相互の考えが交流できるような話合い活動を展開すれば、児童はお互いの考えのよさに気付くであろう。 | ・自分とのかかわりで道徳的価値をとらえられるような振り返りをすることで、自分の思いを見つめ、よりよく生きようとする気持ちがはぐくまれるであろう。<br>・自分の思いや考えを素直に表現する場を設定することで、互いの思いに気付くであろう。 | ・自分自身の生活経験と重ね合わせながら考えることで、自己のよさが分かり、より高めようとする児童が育つであろう。<br>・友達との多様な考えを交流することで、友達のよさを自分にも生かそうとする児童が育つであろう。 |
| **手　だ　て** | | | |
| **自己理解のための工夫** | | | |
| 実態把握の工夫<br>・実態調査に基づいた指名・助言<br>資料の工夫<br>・児童が興味・関心をもち、自分の思いをもたせる資料選択や資料提示の工夫<br>発問の工夫<br>・自分の思いを深めさせる発問の工夫 | 実態把握の工夫<br>・実態に応じた児童一人一人のねらいの設定<br>・実態に応じた意図的指名や評価活動の実施<br>資料の工夫<br>・自己を見つめるのに適した資料選択<br>・考える場面が分かる資料提示<br>発問の工夫<br>・多様な考えを引き出す発問<br>・心情を深く問う補助発問 | 実態調査の活用<br>・導入、展開、発問計画に生かす<br>資料の工夫<br>・児童が共感、葛藤、感動できる資料の選択<br>発問の工夫<br>・本音や多様な考えを引き出す発問<br>表現の場の工夫<br>・自分を深く見つめ、考えを明確にするためのワークシート工夫 | 事前調査の工夫<br>・アンケートや日常観察から、児童の実態と課題を明確にする。<br>資料の工夫<br>・ねらいとする価値に迫るための資料選択、提示の工夫<br>発問の工夫<br>・ねらいに迫る中心発問の工夫<br>・児童の多様な考えを引き出す工夫<br>自己評価の工夫<br>・授業前に設定したねらいと、授業中の発言やワークシートの記述を比べて、児童の変容を評価する。 |
| **他者理解のための工夫** | | | |
| 話合いの工夫<br>・児童一人一人の思いや発言を生かす話合いの工夫<br>板書の工夫<br>・児童の意見を整理し、話合いの助けになるような板書の工夫 | 話合いの工夫<br>・話合いの形態の工夫<br>・登場人物の心情に共感しやすい場面での発問の設定 | 表現の場の工夫<br>・お互いの気持ちを視覚的にとらえるカラーシートの活用<br>・話合いの形態の工夫 | 話合いの工夫<br>・話合いの形態の工夫<br>・登場人物の気持ちをより理解させるための体感の工夫<br>・自分の考えを明確にするための書く活動の工夫<br>板書の工夫<br>・一人一人の思いを大切にする板書の工夫 |

**検　証　授　業**

**総合的な評価（指導計画・指導方法・児童の変容）**

## Ⅱ　低学年分科会主題

**様々な考えに出会う中で、自分の思いをもち、**
**よりよく生きようとする児童を育てる道徳の時間**

### 1　主題設定の理由

低学年分科会では、「心が響く」ことを、心を揺り動かしながら、自己を見つめることととらえた。つまり、道徳の時間に資料との出会いを通して登場人物に共感し、他の児童と考えを伝え合う中で自分自身を見つめ直すことである。

低学年の児童は、何事にも興味を示し、学習中の感動を素直に態度や表情に表す。道徳の時間においては、資料との出会いに期待をふくらませ、資料の世界に浸ることができる。このような実態をふまえ、道徳の時間に資料の登場人物の気持ちに共感し、自分の思いをもつことが大切であると考えた。

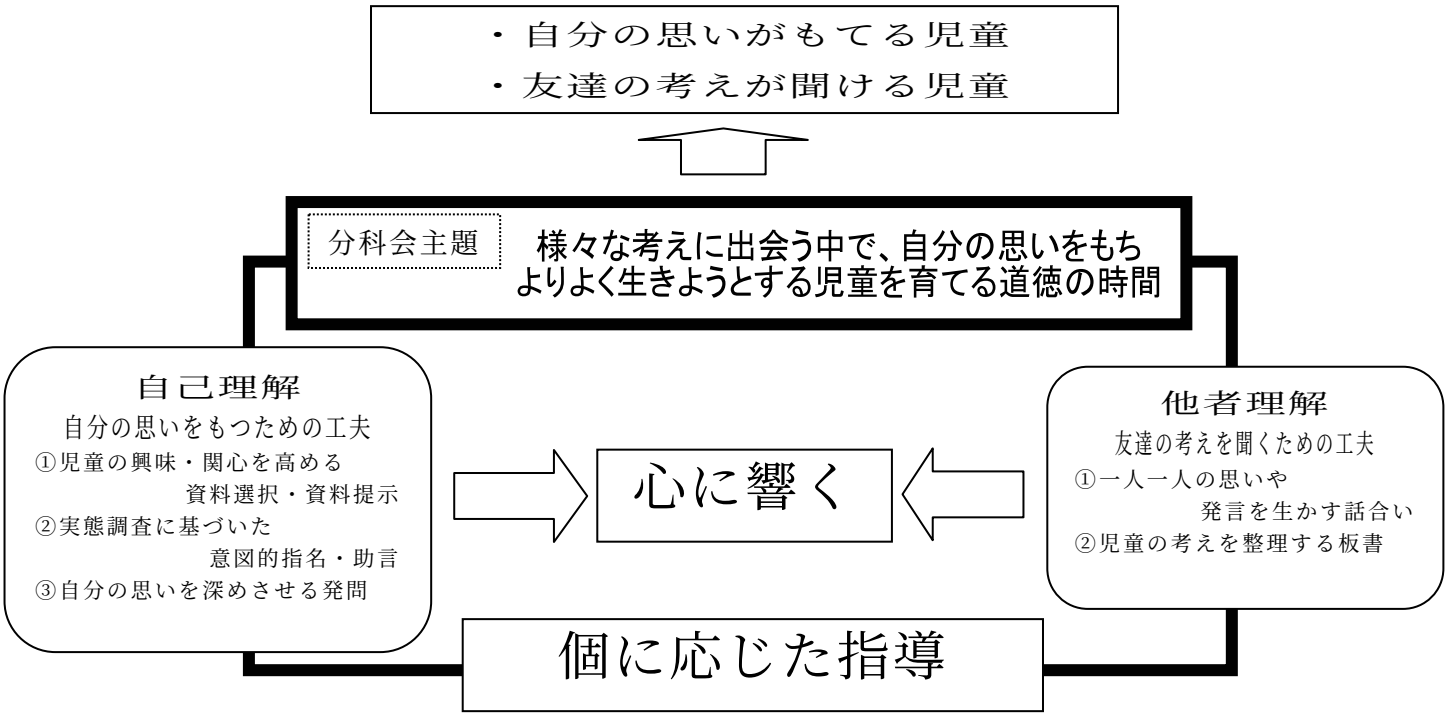
また、低学年の児童は幼児期の自己中心性はかなり残っているが、他人の立場を認めたり、理解したりする力も徐々に発達してくる。道徳の時間に他の児童の様々な考えを聞くことは、自分と似た考えや異なる考えがあることに気付き、新たな思いをもつことにつながる。

そこで、目指す児童像を「自分の思いがもてる児童」「友達の考えが聞ける児童」とした。

児童は様々な考えと出会う中で心を揺り動かしながら、改めて自己を見つめ、新たな思いをもつ。そのような経験を積み重ねることで、よりよく生きようとする気持ちが育っていくと考え、上記研究主題を設定した。

### 2　研究の仮説

・児童の心を打つ資料などを使って、発問を吟味すれば、自分の思いがもてるようになるだろう。
・相互に思いを伝える話合いを展開すれば、友達の考えを聞き合うようになるだろう。

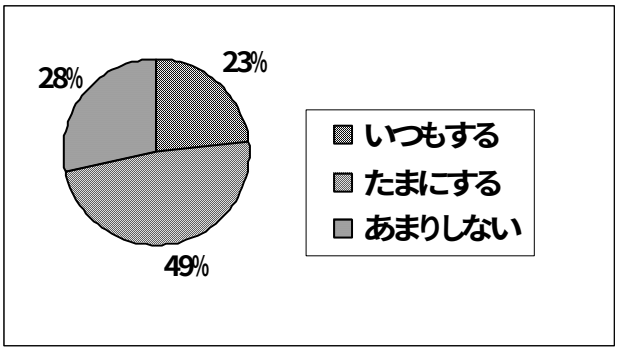


## 3　実態調査

低学年分科会では目指す児童像の実現に向け、道徳の時間における「自分の思いをもつこと」（自己理解）「友達の考えを聞くこと」（他者理解）にかかわって、児童の実態調査を選択肢法で実施した。対象は都内の小学１，２年生（１７４８名）。結果は以下のようである。

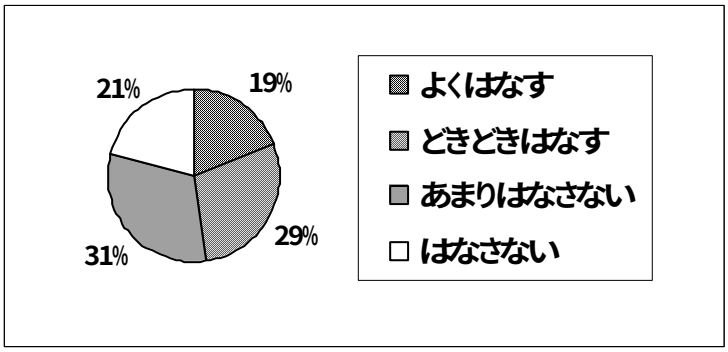
(1)　「自分の思いをもつこと」（自己理解）について

**道徳のお話を聞くと、どきどきわくわくしますか。**




「たまにする」「あまりしない」と答えた児童が全体の４分の３を占める。資料に出会って感動したり、興味をもったりすることで、登場人物の気持ちに共感しやすくなる。この実態から資料の選択・提示の工夫をする必要があると考えた。

**道徳の時間、自分で思ったことをみんなに話しますか。**

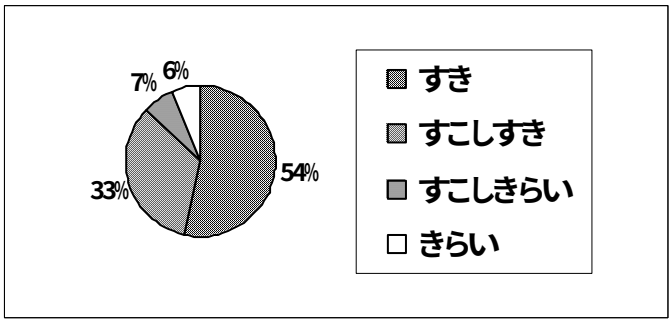



半分以上の児童が、道徳の時間に自分の思いを話していないと答えている。この結果から、自分の思いをもっていても、それを他の児童に伝えていない児童が多いことがわかる。児童が自分の思いを伝えよう、伝えたいと思えるような発問を工夫する必要があると考えた。

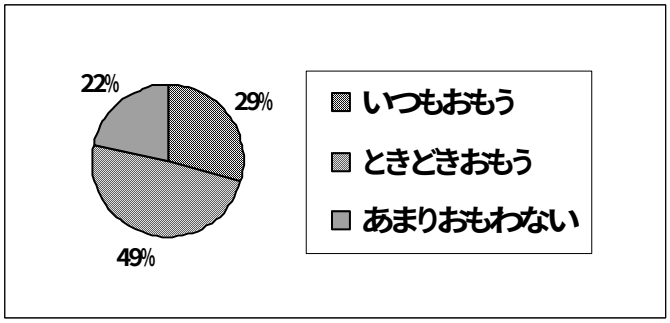
(2)　「友達の考えを聞くこと」（他者理解）について

**道徳の時間、友達の話を聞くのは好きですか。**

ほとんどの児童が他の児童の話を聞くのが好きであることがわかる。さらに多様な考えを聞き、他の児童の考えが知りたくなるような発問を考え、話合いの工夫をすることが必要であると考えた。




**道徳の時間、友達の話を聞いて「なるほど」と思うことはありますか。**




他の児童の考えを聞き、素直に認められる児童が多いことがわかる。自分の考えと他の児童の考えを比較できるような板書を工夫することで、異なる考えを知る機会を増やすことにつながると考えた。また、自分の思いをより深めるために、他の児童の考えを聞く場を設けることが必要であると考えた。

## 4　研究主題に迫るための手だて

### (1)　自分の思いをもつための工夫

①　児童の興味・関心を高め、自分の思いをもたせる資料選択や資料提示の工夫

道徳の時間において、資料は児童が道徳的価値の内面的自覚を深めていくための大きな役割をもっており、展開後段の自己の振り返りで本時のねらいに迫るための橋渡しをするものでもある。資料との出会いがねらいに迫れるかどうかを左右する。児童の実態に合ったわかりやすい資料、登場人物の気持ちに共感しやすい資料を選択することで、児童は自分の思いをもち、今までの自分を見つめることができる。

また、低学年の児童に対し、視覚に訴える資料提示を行うことは、学習の意欲を高め、登場人物に共感しやすくするのに有効である。そこで資料を提示する際に、場面絵や紙芝居を使い、資料の世界に児童が浸りやすくなるような工夫をする。

②　実態調査に基づいた意図的指名・助言の工夫

低学年分科会では事前に道徳の時間に関する実態調査を実施し、一人一人の児童が道徳の時間における「自分の思いをもつこと」「友達の考えを聞くこと」をどのように考えているのかについて把握した。「自分で思ったことを友達に伝えていない」と答えている児童にはワークシート記入時に机間指導を行い助言や励ましをする。その後意図的指名を行いワークシートの内容を発表させることで、自分の思いを友達に伝えさせることができるようにする。また、本時の内容項目について日常の児童の様子を記録し、導入や振り返りの際に声かけをして意図的指名を行い、自分の体験を想起させる。

③　自分の思いを深めさせる発問の工夫

児童が心を揺り動かし、様々な考えが出し合えるように、心に強く残る場面や迷い・葛藤のある場面を中心発問として取り上げる。また、あらかじめ様々な児童の反応を予想し、児童が登場人物の心情について深く考えられるような補助発問を準備する。

### (2)　友達の考えを聞くための工夫

①　児童一人一人の思いや発言を生かす話合いの工夫

教師が児童一人一人の発言を肯定的に受け止め、広めることによって、児童は安心して発言できるだけでなく、友達の発言を意識して聞けるようになる。そこで、児童から出てきた考えを教師が頷いたり返事をしたりしながら取り上げ授業を進める。さらに、児童が積極的に話し合うことができるように、ワークシートを見ながら隣同士向かい合って発表をしたり、役割演技を取り入れたりする。

②　児童の考えを整理し、話合いの助けになるような板書の工夫

低学年児童にとって、友達の考えを聞いてそれを頭の中だけで自分の考えと比較することは難しい。そこで、児童から出てきた考えの似ているところや異なるところを分類し、内容項目に結びつく言葉が目立つように板書しながら授業を進める。

## 5　実践事例

(1)　主題名　ごまかさないで　＜第１学年　１－（４）正直誠実＞

(2)　資料名　「きんいろのクレヨン」

(3)　ねらい　のぼるの気持ちに共感することで正直に生活しようとする心情を深める。

(4)　展　開

| | 学習活動（主な発問と予想される児童の反応） | ・指導上の留意点　○評価 |
|---|---|---|
| 導入 | 1　金色の折り紙の入っている折り紙の束を見せる。<br>○みんなはどの色が好きですか？<br>・赤　・黄色　・青　・金色 | ・金という色を印象づけ、資料への関心を高めさせる。 |
| 展開 | 2　資料「きんいろのクレヨン」を読んで話し合う。<br>①大きなとみこのクレヨンを見てのぼるはどんな気持ちになったでしょう。<br>・いいなあ・使いたいなあ・ぼくもほしいなあ<br><br>②とみこがいない時に、借りてぬっていたきんいろのクレヨンを折ってしまったときののぼるはどんな気持ちだったでしょう。<br>・しまった。どうしよう・わざと折ってないのに<br>・誰も見ていないから、しらんぷりしよう<br><br>◎③「のぼるさん、どうしたの。」と言われて返事ができなかったのぼるは、どんな気持ちだったでしょう。<br>・このまま、だまっていようかな。<br>・言わないとばれちゃうかな。<br>・どうしよう。正直に言おうかな。<br>・正直に言いたいけど、許してもらえるかな。<br><br>④とみこに許してもらった時ののぼるは、どんな気持ちだったでしょう。<br>・許してもらってよかった。<br>→とみこさんが許してくれたのはどうしてだろう。<br>・とみこさんは優しいな。<br>→とみこさんが優しかったのはどうしてだろう。<br>・正直に言ってよかった。<br>・うそを言おうと思った自分が恥ずかしい。 | 自分の思いをもつための工夫①<br>資料提示<br>・「えんがわ」の用語の意味とのぼるの家で絵を描いていることを確認する。<br>・とみこがいないときに、誤ってクレヨンを折ってしまったのぼるの気持ちに共感させる。<br><br>・先ほどとは様子が違うことに気付かれ、いよいよ正直なことを言わなければならない状況に追い込まれたとき、ののぼるの気持ちに共感させる。<br>自分の思いをもつための工夫③<br>自分の思いを深めさせる発問<br>○ワークシートに向き合い、のぼるの気持ちを考えているか。<br>友達の考えを聞くための工夫①<br>一人一人の思いや発言を生かす話合い<br>・ワークシートに書けない子は、友達の発表を聞いて自分に近い意見をワークシートに書き足していいことを伝える。<br>・正直に話して、とみこに許してもらった時ののぼるの気持ちに共感させる。<br>・ねらいからそれる反応をした児童がいたとき（＿＿部分）の補助発問を投げかける。 |
| | 3　自己の振り返りをする。<br>○　「うそをつかないで本当のことを言ってよかったなあ。」と思ったことはありませんか。 | ・のぼるのような経験が自分にもなかったか振り返る。<br>○自分の経験を振り返ったり、友達の考えを聞きながら自分にも似たようなことがなかったか考えたりしているか。 |
| 終末 | 4　教師の説話を聞く。 | ・正直に言ってよかったなあ。と思ったときのことを話す。 |

(5)　評価　のぼるの気持ちに共感し、正直に生活しようとする心情が深まったか。

## 6　考察

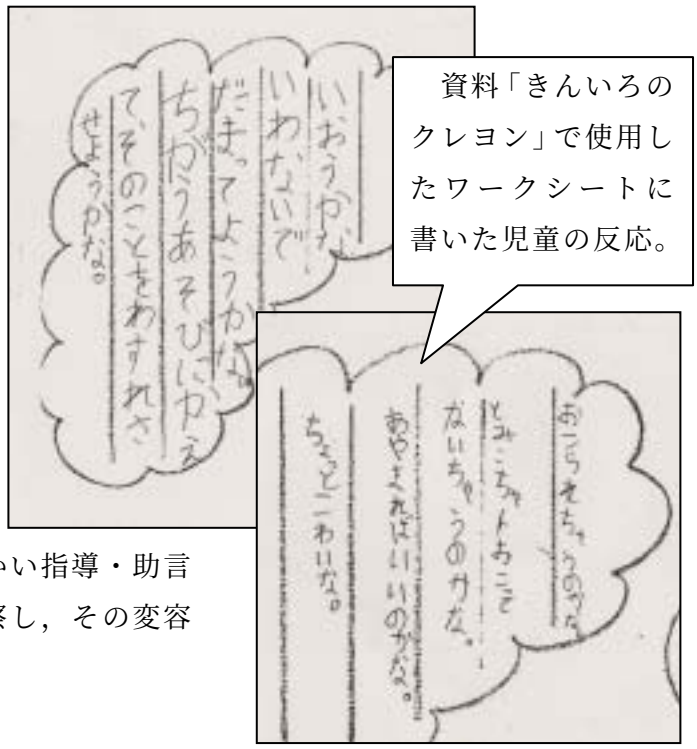
### (1)　自分の思いをもつための工夫

①　児童の興味・関心を高め、自分の思いをもたせる資料選択や資料提示

資料に出てくるクレヨンの模型や、自作の紙芝居を提示して授業を進めたところ、児童がそれを見ながら「とみこのクレヨンがうらやましい。」「一人ぼっちのやまがらが心配だ。」など、登場人物の気持ちにより共感し、自分の思いをもつことができた。このことから、児童の実態に合った、わかりやすい資料や登場人物の気持ちに共感しやすい資料を選択し、視覚に訴える資料提示を行うことが有効であることがわかった。

②　実態調査に基づいた意図的指名・助言

事前に実施した実態調査を自分の学級の結果と比較・分析することによって、学級の特徴と道徳の時間における児童の実態を把握することができた。特に「自分で思ったことを友達に伝えていない」と答えている児童に対し、ワークシートをもとにした発表の際、意図的指名を行った。その後の授業では、積極的に発言する姿が見られるようになった。




資料「きんいろのクレヨン」で使用したワークシートに書いた児童の反応。

今後さらに実態調査・意識調査を細かく行い、一人一人の児童に応じたきめ細かい指導・助言を行い、授業後も児童の日常の様子を観察し，その変容を見取る必要がある。

③　自分の思いを深めさせる発問

事前に予想される児童の反応から、あらかじめ補助発問を用意したことで、本時のねらい以外の価値に関する反応をした児童も本時のねらいに沿って登場人物の心情を深く考え、自分の思いを深めることができた。

### (2)　友達の考えを聞くための工夫

①　児童一人一人の思いや発言を生かす話合い

ワークシートをもとにした発表を行うことで、安心して児童も自分の考えをみんなに伝えることができた。その結果、普段発言の少ない児童も、他の児童との交流を通して自ら挙手をして発言する姿も見られた。

②　児童の考えを整理し、話合いの助けになるような板書

教師が児童の考えを板書する際、似ている考えや異なる考えを吹き出しに分けて書くことによって、児童は自分の考えと他の児童との考えを比べながら学習することができた。児童の考えがより整理されるように、児童の発言の要点を押さえた、わかりやすい板書をさらに工夫する必要がある。

## Ⅱ　中学年Ａ分科会主題
## 互いのよさに気付き、よりよく生きようとする児童を育てる道徳の時間

### 1　主題設定の理由

心に響くとは、これまで気付かなかった自分自身の姿に気付くことである。そして、あらためて自分を見つめなおし、将来への生き方を切り拓いていこうとする意欲を高めることであるととらえた。

中学年の児童は、自己内省する力が育つ時期であるといわれる。一方で、快活さと興味の拡大から周りの人々のことを考えずに自己中心的な行動をしてしまう傾向もある。つまり、自分自身の姿を見つめ直す機会も多く、またその力が育つ時期であるといえる。

そこで、その発達段階を生かし、目指す児童像を「自分のことを見つめる児童」とした。また、自分の考えを深めるためには、より多くの意見にふれることも必要であると考える。そこで、２つ目の児童像として「友達のよさに気付く児童」とした。このことは、再び「自分のことを見つめる」行為につながり、それによって「自分のよさ」も発見できると考えた。そうした考えの交流を繰り返すことで道徳的実践意欲が高まり「よりよく生きようとする児童」が育つと考え、上記の研究主題を設定した。

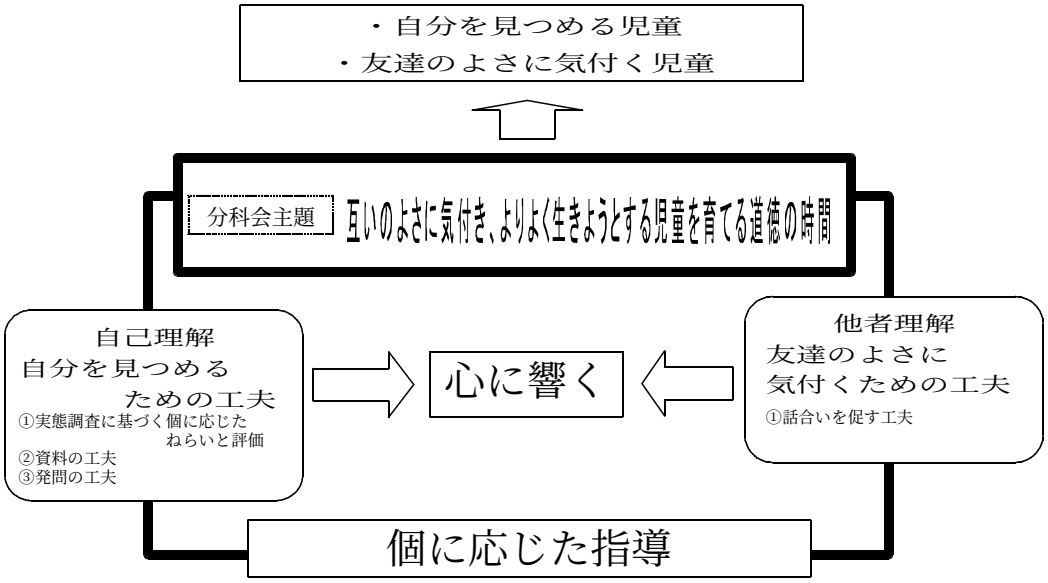
「互いのよさに気付く」とは、児童一人一人に考えをもたせ、多様な考えを交えることにより、児童同士が共感し合ったり、対立し合ったり、自分の考えを修正したりして学び合い、自分自身だけでなく友達のよさにも目を向けることができるようになること考えた。道徳の時間の主に話合いの場面で重点的に迫るようにする。

「よりよく生きようとする」とは、道徳の時間に、自分の中にある生き方の課題と向き合い、その中で自己肯定感をもつことで具現化できると考えた。

### 2　研究の仮説

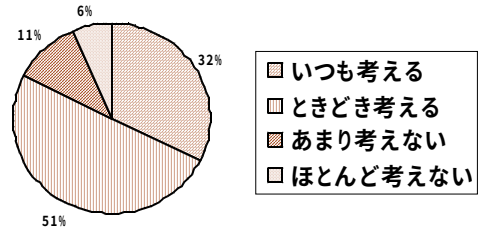
・これまでの自分を振り返り、これからの自分の生き方を見つめられるような資料を選択し発問をすれば、児童は自分のことを見つめるであろう。

・児童相互の考えが交流できるような話合い活動を展開すれば、児童はお互いの考えのよさに気付くであろう。



## ３　実態調査

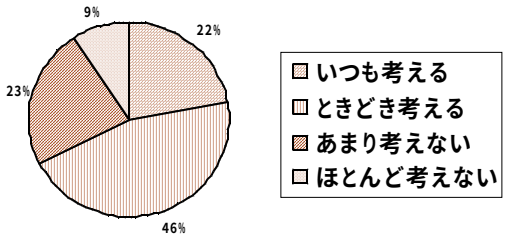
中学年の児童が道徳の時間に資料に触れ、どのように感じ、また、他の児童の意見をどのように受けとめて考えているかという自己理解・他者理解について児童の実態を把握するため、アンケートを実施した。対象は、都内の小学３・４年生（４９４名)、アンケートの形式は、記名、選択肢法で行った。質問１・２では自己理解に関する質問、質問３・４では他者理解に関する質問である。



①道徳の時間に、お話に出てくる登場人物の気持ちを考えていますか。

①の質問について

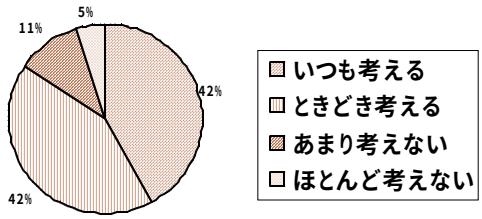
３分の２以上の児童が登場人物の気持ちをよく考えていることが分かる。しかし、あまり考えないという児童もおり、意欲を喚起したり、自分の心に向き合えたりするような資料選択や、発問の設定が重要であること考えた。



②道徳の時間に、自分のことをふり返りながら考えることがありますか。

②の質問について

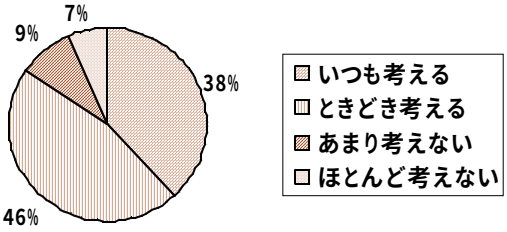
多くの児童が自分のことを振り返りながら考えているが、30 %あまりの児童が自分自身を振り返りながら考えていないということが分かる。児童の心に響き、自分と重ね合わせやすい資料を選択することが望ましいので、振り返りの時間も十分にとることも必要である。



③道徳の時間に、友達の意見を聞いて、自分の考えと「同じだな」「ちがうな」と感じたことはありますか。

③の質問について

３分の２以上の児童が他の児童の意見に共感したり、自分とは違う考えがあることを感じたりしている。話合いを通して、児童間の意見の交換を活発に行うことによって、より深く考え、自他の考えのよさに気付くことができると考える。



④道徳の時間に、友達の意見を聞いて、「なるほど」と思ったことはありますか。

④の質問について

他の児童の意見を「なるほど」と思って聞いている児童が多い。互いの意見を交換する中で他の児童のことを認め合おうとしていることがうかがえる。十分に話合いの時間をとることで、他者理解が深まると考える。

## 4　研究主題に迫るための手だて

(1)　自分を見つめるための工夫（自己理解）

①　実態調査に基づく個に応じたねらいと評価

的確な実態調査を行う観点として、「道徳の時間の実態」、「価値にかかわる実態」、さらに、日々の人間関係を含めた児童の様子を把握するために、「日常の様子や学級（人間関係、発言等）の実態」の３点を重点とした。

これらの結果を基に、道徳の時間における児童一人一人のねらいを設定したり、意図的指名や、支援、評価に活用したりした。そのことにより、より個に応じた指導が展開できると考えた。

②　資料の工夫

ア　資料選択について

道徳の時間における児童と資料との出会いはとても大切なものである。よって、児童の実態をふまえた資料選択をすることが重要である。具体的には、

〇児童が興味をもつ話である。〇場面ごとの登場人物の心情がつかみやすい。

〇登場人物の様々な立場を受け入れやすい。〇身近な内容を取り上げた資料の場合、登場人物が動物であるものや、児童の書いた作文形式のものにすると、児童は意見を言いやすい。

の４点を重点とした。このことにより、これまでの自分を振り返ったり、これからの自分の生き方を見つめることがより深くなると考えた。

イ　資料提示について

葛藤場面や心情の変化が分かる場面は、児童にとって心が最も揺さぶられる場面でもある。その場面を、登場人物のせりふや心情を表す言葉などを拾い上げて分析することにより、考えさせたいポイントを明確にして児童に提示することで、より話合いが深まると考えた。

③　発問の工夫

児童の思いや心の揺れを引き出すのが発問である。児童が自分の内面にある思いを深く見つめ、本時のねらいに近づけるようにするためには、

〇ねらいがはっきりと示されるような発問〇児童の多様な考えが引き出せるような発問〇心情を深く問う補助発問などの適切な活用

の３点が大切であると考えた。このようにすることで、児童の思考が表面的にならず、一人一人が自分自身を深く見つめて意見が述べられるようにできると考えた。

(2)　友達のよさに気付くための工夫

①　話合いを促す工夫

話合いの進め方について、児童の実態（話合いの経験）、資料（葛藤資料、感動資料など）、ねらいとする内容項目などから検討して行く必要があると考えた。また、その進め方に合わせて、座席の形や話し合う人数なども工夫することで、話合いが充実すると考え、本分科会では、次のような方法に取り組んだ。

・教師と児童が１対１の関係から話合いを深めていく。また、必要に応じて、対話的な場面も取り入れる。

・教師と児童が１対多の関係を設定し、似た考えの児童が集中的に意見を言う場面を作る。中間的な立場や微妙な揺れも表現させるよう努める。二者択一の立場ではない話合いが進められるようにする。

・違った立場の意見も受け入れながら小集団の中で話合いが進められる。

・他の児童の考えのよさを認めたり、自分との違いに注目したりしながら話合いが進められる。

## 5　実践事例

(1)　主題名　本当の友達（第３学年　２－（３）信頼･友情）

(2)　資料名　「ともだちや」　内田麟太郎　作　　降矢なな　絵　（偕成社）

(3)　ねらい

・キツネの気持ちに共感することで、友達を大切にしようとする心情を育てる。

・お互いの考えを交流することで、友達についての自分の考えを深めることができる。

(4)　展開

| | 学習活動(主な発問と予想される児童反応) | 指導上の留意点・及び評価の視点○ |
|---|---|---|
| 導入 | 1　「友」という字 の成り立ちを見る<br>○「友」という字にはどんな意味が表されていると思いますか。<br>・手を合わせている。 | ・甲骨金文文字の「友」の字を見て考えさせる。 |
| 展開前段 | 2　資料をよんで話し合う。<br><br>①キツネはどうして友だち屋をはじめようと思ったのでしょう。<br>・友達もお金もほしかったから<br>・自分がさみしかったから<br><br>②しくしくするおなかを押さえながらクマから 200 円をもらったとき､キツネはどう思ったでしょう。<br>・友達になるのは大変だなぁ<br>・お金をもらったんだから我慢だ<br>・なんだかさみしいなぁ<br>◎③オオカミに｢友達から金を取るのか、それが本当の友達か！｣と言われたとき、キツネはどう思ったでしょうか<br>・こわい<br>・本当の友達ってどういうことだろう<br>・本当に友達だと思ってくれてうれしい<br>・お金を取ったら友達じゃない<br><br>④キツネがスキップして帰ったときはどんな気持ちだったでしょう。<br>・友達ができてよかった。<br>・もう友だちやをやらなくていいんだ。 | ・紙芝居にして提示<br>（発問時に場面絵として使用）<br>自分を見つめるための工夫②<br>資料の工夫<br>・「キツネに友達はいたのかな」という補助発問をし、友達のいないキツネの寂しさに共感できるようにする。<br>・①の反応と比較することで、キツネの揺れ動く気持ちや満たされない気持ちに気付けるようにする。<br>・後にスキップして帰るキツネと対比ができるよう、板書を工夫する。<br><br>自分を見つめるための工夫　③<br>発問の工夫<br>友達のよさに気付くための工夫　①<br>話合いの工夫<br>・「本当の友達ってどういうことだろう」という補助発問をすることで、友達の在り方について考えを深められるようにする。<br>・他の意見と自分の意見の違いや同じ所などが意識できるように、話合いを進める<br>○本当の友達について深く考えるようになったキツネに共感できたか。<br>・②の反応と比較できるように板書を工夫することで、満たされた気持ちのキツネに共感できるようにする。 |
| 展開後段 | 3　今までの生活を振り返る。<br>○友達がいてよかったなと思うのはどんなときですか。その時どんな気持ちですか。<br>・困っているときに助けてくれてうれしかった<br>・一人でいるときに声をかけてくれた<br>・たくさんの友達と一緒に遊んだとき | 自分を見つめるための工夫　①<br>個に応じたねらいと評価の工夫<br>・事前の実態調査の結果を生かした支援や意図的指名を行う。<br>○前段での話合いをもとに、自分の経験を振り返り、友達を大切にしようとする心情がもてたか。 |
| 終末 | 4　終末<br>○歌「友達になるために」を歌う | ・友達同士で教え合っていた姿を見た教師の思いを伝えてから歌う。 |

(5)　評価

・キツネの心情の変化に共感できたか。

・これまでの自分を見つめたり、お互いの考えを交流したりすることで、本当の友達について考えを深めることができたか。

## ６　考察

(1)　自分を見つめるための工夫（自己理解）

①　実態調査に基づく個に応じたねらいと評価の工夫

本時においては、特に価値にかかわる実態を中心にまとめた。児童個々のねらいを設定し、それを基に話合いやワークシートの記述の場面でそれぞれのねらいに近づくための支援を行った。発言が深まらない児童には、補助発問を行い、考えを深められるようにした。また、考えがまとまらない児童へは、教師との対話を通して自分の思いを出せるようにした。

本時では特に事前の調査で、友達に対する意識の低い児童を中心に支援を行った結果、アンケートで友達とのかかわりについて記述できなかった児童が、展開後段では友達との具体的なかかわりを想起することができた。

②　資料の工夫

資料については、実態調査から見取った、児童の「友情」という価値にかかわる実態から適切であったと考える。クラス替え間もない児童にとって、友達がいることの喜びや友達という存在の意味を考えることは、自分の考えを深めるために重要な機会であった。また、低学年から中学年になったばかりという発達段階を考えても、友達とのかかわり方について葛藤する資料よりも、友達の在り方について考える本資料は有効であった。

③　発問の工夫

発問④「キツネがスキップして帰ったときはどんな気持ちだったでしょう。」は児童がはっきりと本時のねらいを意識して、自分の考えを深めるきっかけとなり、その後、後段へと思いをつなげていくことができたので、有効な発問であった。ねらいについての方向性をはっきりと示す発問を取り入れることは必要であった。

多様な考えを引き出す中心発問では、発問の意図がはっきりと子どもに伝わらず、ねらいに迫る発言を引き出すことが十分にできなかった。発問の提示の仕方や場面の押さえ方、発問の言葉等を、さらに検討する必要があると考える。補助発問については、特に「本当の友達」の意味を問うことはその後の子どもの思考にとって、ねらいに迫る発言があり、大変有効であったと考える。また、その都度、子どもの内的対話を促すような補助発問をしていく必要があるだろう。

(2)　友達のよさに気付くための工夫（他者理解）

①　話合いを促す工夫

教師と児童が１対多の関係から話合いを深めることをねらったが、多くの意見を出させることに終始し、児童相互の意見をつなげたり、一人の意見から話を深めたりということがあまり意識できなかった。内容項目や資料、児童の実態に適した話合いの形態を工夫していく必要がある。

児童の話合いへの参加の形も、発言だけを取り上げて話合いに参加しているととらえるのではなく、役割演技やワークシートへの記述等、幅広く考えていく必要があると考える。

## Ⅳ　中学年Ｂ分科会主題

**様々な感じ方考え方と触れ合い　自分の心に向き合うことにより**
**よりよく生きようとする心を育てる道徳の時間**

### 1　主題設定の理由

中学年Ｂ分科会では、研究主題にある心に響く状態を、子どもの心が揺さぶられている状態ととらえた。これは、外からの刺激により、共感、葛藤したり、感動したりする心の動きのことである。

児童は生活体験の中においても、こうした心の動きを感じてはいるが、その場では自分の心について深く考えることはなかなかできない。そのため、道徳の時間では、意図的に児童の心に揺さぶりをかけ、自分の心に真剣に向き合わせ、自分の思いを見つめさせることが大切であると考えた。また、その後に自分とは違う視点をもった友達の思いや考えを聞くことで、さらに新しいことへの気付きや視野が広がり、今まで気付かずにいた新たな自己の発見へとつながっていく。

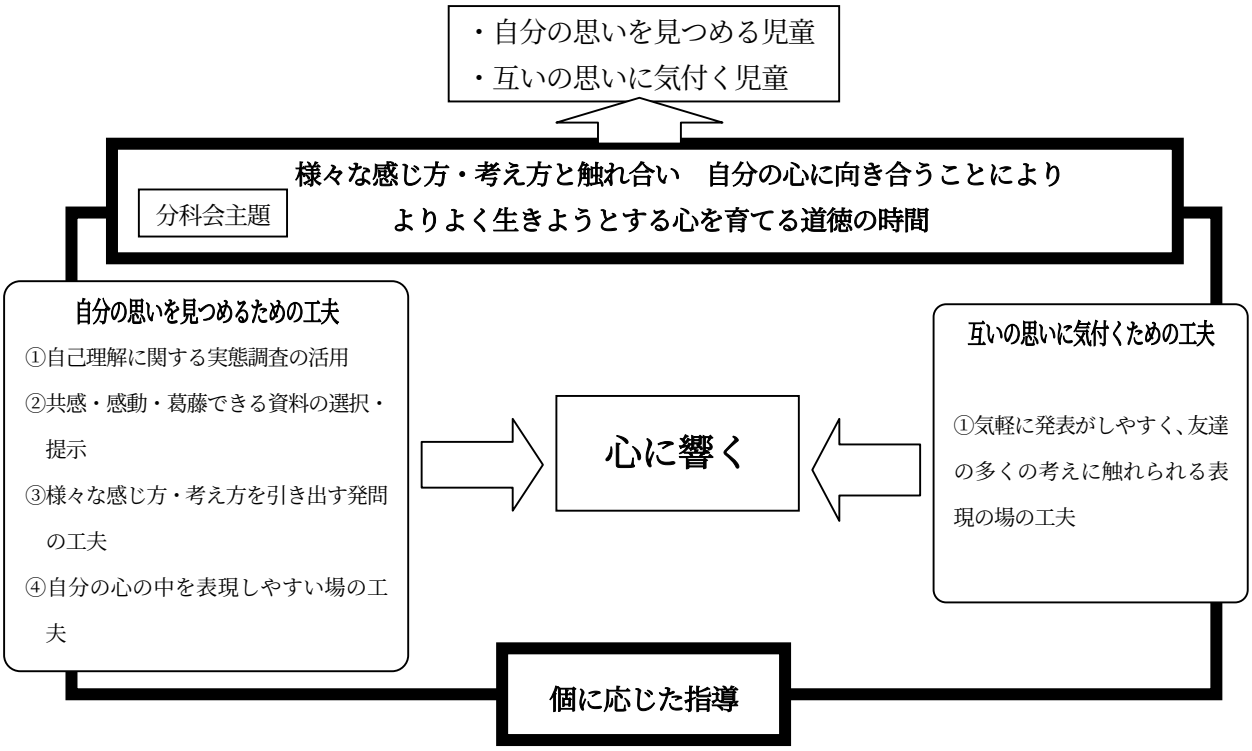
そこで、中学年Ｂ分科会では、目指す児童像を「自分の思いを見つめる児童」「互いの思いに気付く児童」と考えた。

「自分の思いを見つめる」前提として、まずは心に揺さぶりをかける必要がある。そして、自分の心に向き合い自分の思いを見つめさせるためには、漠然と抱いている自分の思いや考えを整理し、明確にするために心の内を表現することが大切である。

また、「互いの思いに気付く」ためには、自分の思いや考えを素直に表現できる場を設定し、のびとびと表現し合うことが大切であり、学級の友達が様々に抱いている思いに気付くことは、再び自分の心を見つめることにもつながる。このことから、上記のように主題を設定し、研究を進めることとした。

### 2　研究の仮説

- 自分とのかかわりで道徳的価値をとらえられるような振り返りをすることで、自分の思いを見つめ、よりよく生きようとする気持ちがはぐくまれるであろう。
- 自分の思いや考えを素直に表現する場を設定することで、互いの思いに気付くであろう。



## 3 実態調査

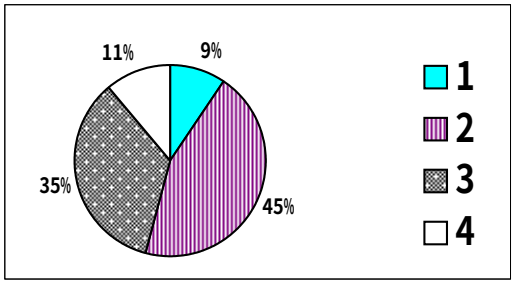
調査対象児童は、都内5校の小学校

3、4年　　合計488名

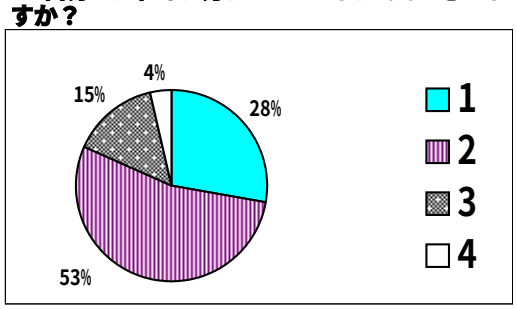
自己理解に関する項目　1、2
他者理解に関する項目　3、4、5

はい　　いいえ
1　2　3　4

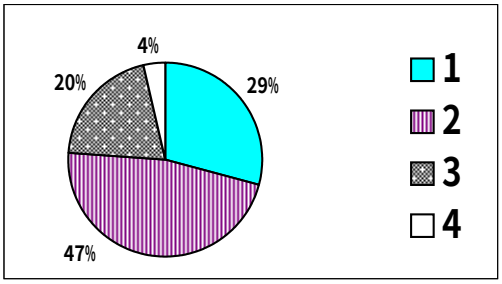
1. 自分にいいところがあると思いますか？



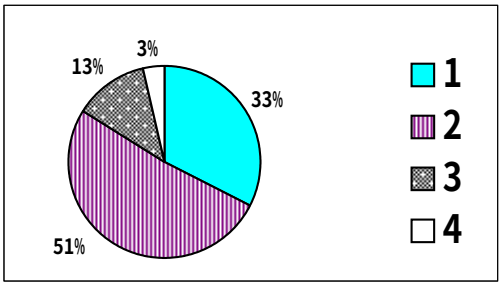

2. 自分には直した方がいいところがあると思いますか？



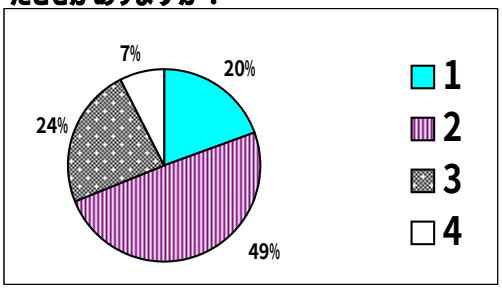

3. クラスの人達のよいところを知っていますか？




4. クラスの人の話を聞いて「なるほど」と思うことはありますか？



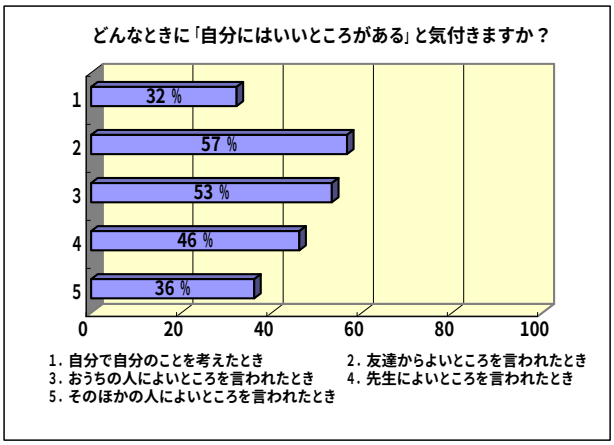

5. クラスの人の話を聞いて自分の考えが変わったことがありますか？




### 考察

アンケートの中の質問１「自分にいいところがあると思いますか？」の項目では５４％の児童が「いいところがある」と答えている。また質問２「自分には直した方がいいところがあると思いますか？」については８１％の児童が「直した方がいいところがある。」と答えている。このことから自己肯定感を得られるような人とのかかわりをもたせることが必要であると考える。

そして「どんなときに自分にはいいところがあると気付くか」というアンケートでは「友達からよいところを言われたとき」と答えた児童が一番多かったことからも道徳の時間においては、自分自身を見つめながら意見を出し合うなかで、お互いに認め合い、自己肯定感が得られるような授業を展開していきたいと考えた。



## 4　研究主題に迫るための手立て

### (1)　自分の思いを見つめるための工夫

①　実態調査の活用

事前に質問紙による実態調査を行い、道徳的価値についての実態を把握し、発問計画、個別指導、展開の導入に生かしていく。導入では、内容項目に対する調査結果を児童に提示し、価値に対する意識付けに活用する。また発問計画では、資料に迫るための発問を計画した際、実態調査の結果をふまえて児童の実態と離れたものになってはいないか、より実態に合わせた発問へと改善していく。個別指導では、実態調査で把握した内容項目に対する一人一人の実態をふまえて指名をしたり、個別に助言をしたりする。

②　心を動かす資料の選択・提示

道徳的価値の自覚を深めるため、児童が共感、葛藤、感動できる資料を選択する。

③　様々な感じ方、考え方を引き出す効果的な発問、補助発問の工夫

児童の本音を引き出しやすい発問、答が限定されず児童の多様な考えを引き出しやすい発問を工夫する。また実態調査の結果をふまえ、発達段階や実態に即した発問を計画する。ねらいに迫り、登場人物の心情をより深く考えられるような補助発問を工夫する。

④　表現の場の工夫a（ワークシート）

自分なりの思いをもっているが発表に消極的な児童も、書くことによって抵抗なく思いを表現できる場合がある。それをもとに話合いに参加もしやすくなる。また、書くことを通して自分を深く見つめ、自分の考えが明確になることから、ワークシートに書き込む活動を毎回取り入れてきた。児童の表現意欲を引き出すために、ワークシートに吹き出しや場面絵を用いることで、書く視点を明らかにする。また、思いを色として表現する場を設け、思いはあってもなかなか書けない児童には、その色で表現した理由を聞くことで、思いを言葉に変えて表現する一助とする。また話合いの後、過去や現在の自分を振り返り自分の心を見つめる場を毎回設けるようにする。

### (2)　互いの思いに気付くための工夫

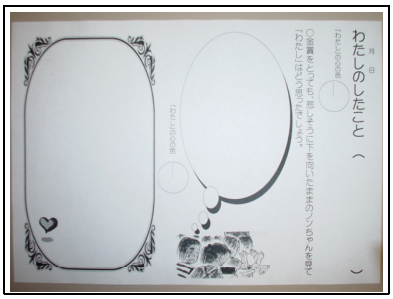
①　表現の場の工夫ｂ（カラーシート）

カラーシートとは、嬉しさ・悲しさ・怒りなどの心の微妙な状態を、ピンクと灰色の割合によって表現させるために作った教具である。これを活用することにより、資料の主人公の気持ちを言葉でうまく表現できない児童にとっても、色の割合によって容易に表現することができる。また、全員が同時に自分の意見を視覚的に発表することができ、教師や他の児童も、その児童の思いを視覚的に見たり自分と比べたりすることができる。

②　表現の場の工夫ｃ（話合い）

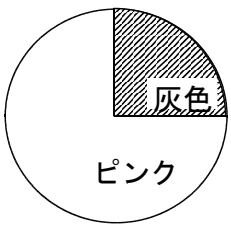
状況をより具体的に把握できるよう、隣同士での役割演技を行う。また、他の児童の意見を聞いてさらに自分の考えを発展することができるよう、児童の意見を板書にその都度残す。全体での発表に消極的な児童も授業に参加しやすくするため、少人数での意見交換を取り入れる。

〈ワークシート〉




吹き出しや場面絵を用いることで、より一層、登場人物の気持ちに近づけるようにする。

〈カラーシート〉




ピンクと灰色の円を用い、その色の割合でプラスの気持ちとマイナスの気持ちを表す。

5　実践事例

(1)　主題名　親切とおせっかい〈第４学年　２－（２）思いやり・親切〉

(2)　資料名　「わたしのしたこと」

(3)　ねらい　親切とおせっかいの違いに気付き、相手の立場に立って親切にしようとする心情をはぐくむ。

(4)　展　開

| | 学習活動<br>主な発問と児童の反応 | ・指導上の留意点　○評価の観点 |
|---|---|---|
| 導入 | 1「親切とは何か」についての実態調査に書かれた意見を取り上げる。 | **継続的に行っている実態調査を生かし、様々な考えがあることに気付かせる。**<br>自分の思いを見つめるための工夫①（実態調査の活用） |
| 展開 | 2　資料「わたしのしたこと」を読んで、主人公の気持ちを考える。<br><br>○「自分でやるから」というノンちゃんの言葉を気にせず、色塗りをしてあげる「わたし」はどんなことを思っているでしょう。<br>（カラーシート）<br>・友達じゃない、遠慮しないでいいのよ。<br>・まかせておいて。<br>・いい絵にしよう。<br><br>◎金賞をとっても悲しそうに下を向いたままのノンちゃんを見て「わたし」はどう思ったでしょう。<br>（カラーシート）<br>・金賞をとったのに、何で嬉しくないんだろう。<br>・私がしたことはいけないことだったのかな。<br>・自分で最後までやりたかったんだろうな。<br>・もっと喜んでくれると思ったのに。<br>〈補助発問〉<br>◇どうして「わたし」はノンちゃんの絵を見ることができなかったのでしょう。 | ・「『わたし』がしたことは本当の親切だったのだろうか。」と投げかけて資料に入る。<br>・自分の思いこみで行動しているところに気付かせる。<br>**張り切って手伝っている主人公の気持ちを色で表現する。**<br>互いの思いに気付くための工夫①（表現の場の工夫 b）<br>・「わたし」とノンちゃんの役になり、役割演技をする。<br>・吹き出しを掲示することにより、考えの浮かばない児童にも表現しやすくする。<br>・ノンちゃんが喜んでいないことに気付かせる。<br><br>**ノンちゃんが悲しんでいる気持ちを深く感じとらせるために補助発問を用意しておく。**<br>自分の思いを見つめるための工夫③（様々な感じ方、考え方を引き出す効果的な発問、補助発問の工夫）<br><br>**ワークシートを吹き出しの形にすることにより、書く視点を明らかにし、主人公の気持ちを想起しやすくする。**<br>自分の思いを見つめるための工夫④（表現の場の工夫 a）<br><br>**ワークシートに書いたことをもとに発表したり、友達の意見を聞いて思ったことを発表したりする。**<br>互いの思いに気付くための工夫②（表現の場の工夫 c）<br><br>○おせっかいと親切の違いに気付くことができたか。 |
| | 3　自分に置き換えて考える。<br>○自分が親切にしたつもりでしたことなのに、相手が喜んでいなかったのではないかと思うことはありませんか。<br>・ゲームの苦手な友達の代わりに先に進めてしまった。<br>〈補助発問〉<br>◇今までに親切にされて、本当に嬉しかったことはどんなことですか。 | ・自分の体験を振り返り、本当の親切とは何か考えさせる。<br><br>○相手の立場を考えて、親切にしようとする気持ちをもつことができたか。<br>・おせっかいの体験が思いつかない児童には、補助発問により、本当の親切について考えられるようにする。<br>自分の思いを見つめるための工夫③（様々な感じ方、考え方を引き出す効果的な発問、補助発問の工夫） |
| 終末 | 4．教師の説話を聞く。 | ・思いやりに触れた体験を話す。 |

(5)　評価

・おせっかいと親切の違いに気付くことができたか。

・相手のことを考え、親切にしようとする気持ちをもつことができたか。

6　考察

**(1)　自分の思いを見つめるための工夫**

①　実態調査の活用

実態調査における質問紙の設問に答えることで、児童がその時点での自分の生活を振り返ることができ、その後、質問項目（例えば親切な行為の具体的事柄の経験有無など）にあげたことを意識して生活する様子が見られるようになった。

実態調査を行わずに発問を考えた時には、児童の反応を予測しきれず、意図したように授業が展開しないことがあったが、実態調査を行うことで、児童の現状を把握でき、一人一人が自分の心に向き合えるような本時の導入､展開及び発問計画に生かすことができた。授業内での個別評価への活用については、今後の課題であると考える。

②　心を動かす資料の選択・提示

児童が共感、葛藤できる身近に起こり得る資料を選定することにより、登場人物になりきって心の動きをとらえた発言やワークシートへの書き込みが見られた。

③　様々な感じ方、考え方を引き出す効果的な発問、補助発問の工夫

一つの発問について考える時間を十分に確保するため発問を厳選し、展開では３つの発問に絞った。中心発問にじっくり時間をかけたことで、一つの思いに片寄るのではなく、まさに揺れ動いている心の状態を、自分の中でいろいろな方向から考え、さらに思いを深めることができた。また、考えが表面的になる場合や内容項目に深まりが見られないときには、補助発問により深まりが見られた。

④　表現の場の工夫 a（ワークシート）

ワークシートでは、思いを色として表現する場を設けることで、言葉による表現が苦手な児童でも、心の中の微妙な状態を色で表すことができ、視覚的にとらえることができた。そして、展開の前段、後段の自分の心の変容を即座に確認することができた。また、必ず自分自身について振り返る場を設けることで、学習を重ねるうちに、今までの経験や体験を具体的に思い起こし、素直に自己を振り返ることができた。また、自分自身の心の状態を見つめられることで、自己評価にもつながった。さらに、ワークシートを返却後に、その後に考えたことを書き加える児童もあり、継続して自分を見つめようとする姿も見られた。

**(2)　互いの思いに気付くための工夫**

①　表現の場の工夫 b（カラーシート）

カラーシート等の提示により、自分と違う考えがあることを視覚的にもとらえることができた。それぞれが心の状態を表しているため、その理由を考えさせる発問をすることで、より深い思いを導くことができ、一層互いの思いに気付くことができた。

②　表現の場の工夫 c (話合い)

発表に消極的な児童でも、隣同士で役割演技をすることや、少人数での意見交換であれば、声に出して自分の思いを伝えたり、友達の考えを聞いたりして、自分の考えを深めることができた。そして、児童一人一人の発言を大切にし、板書に残すことで、それを見て友達の思いを確認しながら、さらに自分の考えを発展させることができた。

## Ⅴ　高学年分科会主題

### 多様な考え方を認め合い、自分を見つめ、心を高めようとする道徳の時間

### １　主題設定の理由

高学年分科会では、「心に響く」状態を児童一人一人の気持ちが揺さぶられる状態、自分を振り返りこれから先への意欲をもとうとする状態と考えた。そして、このような状態を大切にすれば、児童のありのままの気持ちや考えが表現される授業になると考えた。

ところが、高学年の児童は、周囲のことが気になったり、道徳的な価値を知識として理解したりするので、「このように行動すべきである」「このように考えるべきである」といった周りを意識した発言や感想を書くことが多い。これは、道徳の時間の目標の中の「道徳的価値の自覚を深める」ことが不十分なために起きてしまうことと考えた。

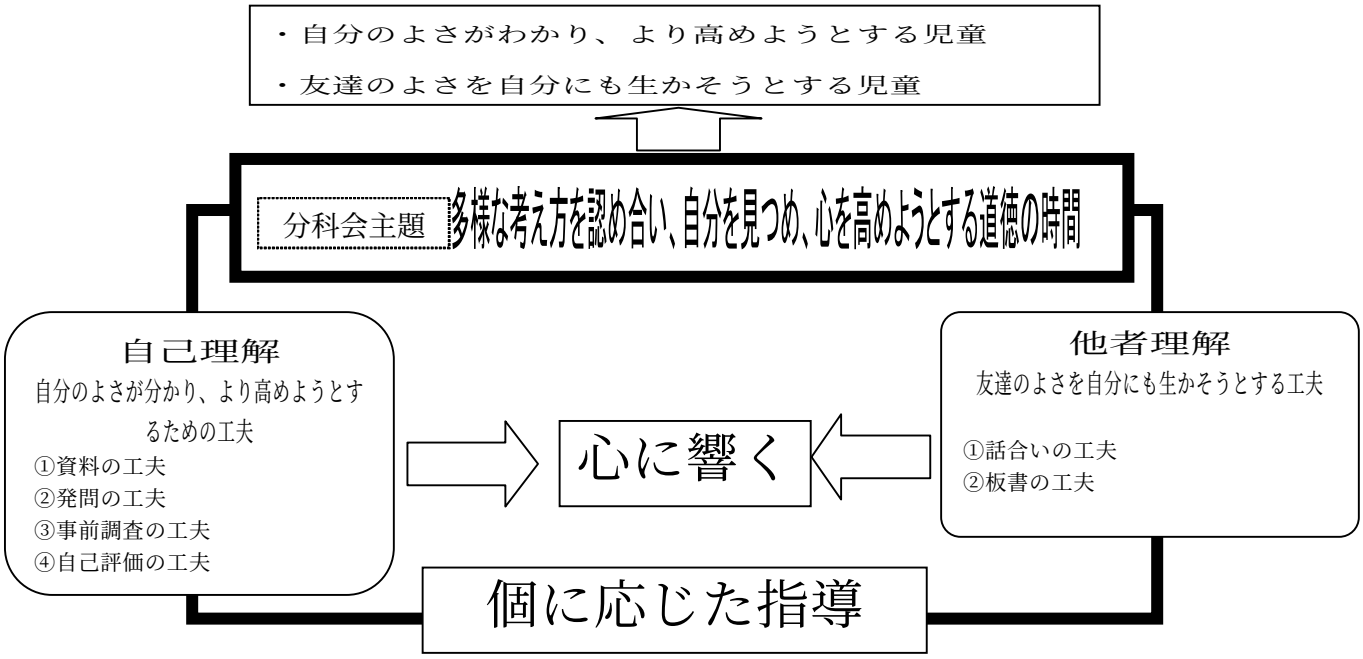
「道徳的価値の自覚を深める」ためには、「道徳的価値の大切さと理解を深め」、その視点から「今までの自分を見つめ」、これからの課題を「自分なりに把握し、その実現へ向けて意欲を高めて」いかなければならない。また、自分の意見を言い、友達同士で話合うことも道徳的価値の自覚を深めることになる。自分にない考え方や感じ方と出会うことで、新しい価値を発見することにつながるからである。このことから、「自分を見つめ、自分と話し合うこと」「友達同士で話し合い、考えを深めること」が大切な活動であると考えた。

そこで、目指す児童像を「自分のよさが分かり、より高めようとする児童」「友達のよさを自分に生かそうとする児童」とした。自分の生活体験と重ね合わせながら自分を見つめることで、自分のよさや改善点に気付き、より自分を高めていこうとする気持ちが育つと考えた。また、友達との話合いを通していろいろな考え方に気付きそのよさを自分に生かしていくことで、心が高まっていくと考え、上記主題を設定し研究に取り組んだ。

### ２　研究の仮説

・自分自身の生活経験と重ね合わせながら考えることで、自己のよさが分かり、より高めようとする児童が育つであろう。

・友達との多様な考えを交流することで、友達のよさを自分にも生かそうとする児童が育つであろう。



## ３　実態調査から

高学年分科会では、目指す児童像の実現に向け、所属校５・６年生７８１名の児童を対象に実態分析を進めることとした。

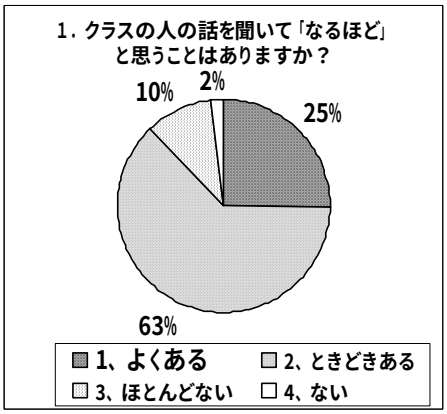
ア、他者とのかかわりについて

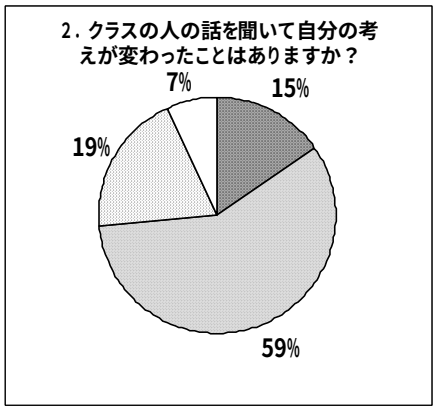
友達の話を聞いて「なるほど」と思う、他者を認める傾向は全体で８７％である。この結果から、高学年では友達とかかわり合いながら学習を進めることが有効であると考えた。

しかし、それによって自分の考えが変わると答えた児童は、１０％程度下がる。これは、

・他者の考えを受け入れることが苦手である。

・他者に影響されない確固たる自分の考えがある。といった面のいずれかだと考える。

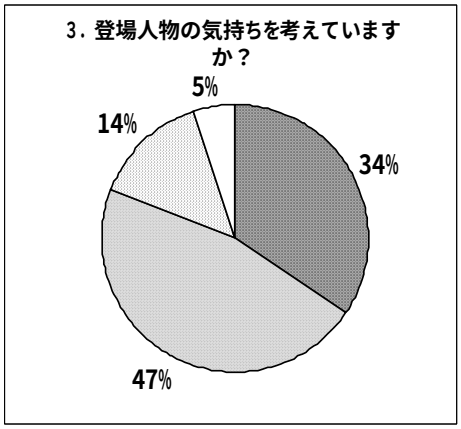


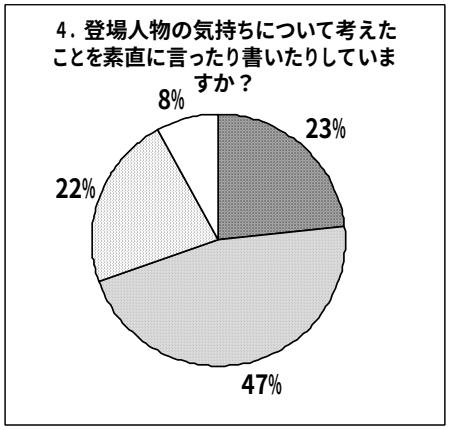




イ、自己にかかわること

登場人物の気持ちを考えているとした児童は、全体の８０％である。この実態を見ると、自分をしっかり見つめている傾向にあると考えられる。

しかし、それを言う、書くなど、表現している児童は６９％と下がる傾向にある。また、表現しないと答えた児童が３０％にも上ることから、高学年ではやはり自分を表現することが弱い傾向にあると考えられる。「なるほどと思っても考えを変えられない」「登場人物の気持ちを考えても表現しない」という傾向が高学年にはあると考えられる。




○回答を通して、高学年ではやはり「自分を見つめること」「友達と交流すること」が有効だと考えた。「考えが変わらない」「気持ちを考えない」と答えた児童については、それぞれの思いや考えを大切にし、道徳の時間に意欲的に参加させるようにしていきたい。

## ４　研究主題に迫るための手だて

### （１）自分のよさが分かり、より高めようとするための工夫

①　資料の工夫

ア　児童の生活体験にかかわり、児童の心に残るような資料を選択することによって、児童が自分自身を見つめ、ねらいとする価値を感得することができるのではないかと考えた。

イ　資料の内容に合わせた提示の仕方を工夫していく。そのことによって、児童は資料に引き込まれ、資料のもつ価値により深く触れることができるのではないかと考えた。

②　発問の工夫

ア　児童が資料と出会ったときに感じたことは、気になったことなどを大切にするために、初感を問うこととした。その感想は、児童の課題をとらえることもできる。それを大切にすることにより、児童は意欲的に学習が進められ、自分の思いの変容に目を向けていけると考えた。

イ　考えが深まらない児童に対して、根拠を明らかにするような補助発問を工夫することによって、児童の思いが掘り下げられ、より深く自分を見つめる学習活動になると考えた。

③　実態調査の活用

ア　自分理解と他者理解に関する意識と、授業で扱う内容項目に対する意識を事前に調査する。その調査により、児童一人一人の思いを把握することができ、同時にその変容にも目を向けられると考えた。

④　自己評価の工夫

ア　展開後段でワークシートに自分の思いを書き込むこととした。自分の思いを書き込むことによって、児童が自分自身の変容をとらえられると考えた。

イ　「自分理解と他者理解」に関する意識評価の項目を、ワークシートにも取り入れ、継続して自己評価させていく。そのことによって、児童の思いの変容がとらえられるのではないかと考え、「友達の話を聞いてどうだったか」「登場人物の気持ちを考えられたか」「自分の考えを表現できたか」という視点から振り返るようにした。

### （２）友達のよさを自分にも生かそうとするための工夫

①　話合いの工夫

ア　高学年では、自分の思いをなかなか言葉に表現できないことが多い。周囲を意識し、考えがまとまらないことなどがその要因であろう。そこで、全体の場での発表の前に、「二人で」「グループで」等の話合いの場の工夫をする。そのことにより、友達との交流が図られ、新しい価値の発見につながると考えた。

イ　話合いの中に「体感する活動」を取り入れていく。資料の場面の役割演技をしたり、主人公の行動を追体験したりという「体感」を通して、主人公への理解の深まり、お互いがそれを出し合う中で、多様な考えを認め合うことができるのではないかと考えた。

②　板書の工夫

ア　一人一人の思いを大切にし、それが全体のものになっていくよう、発言を児童の名前とともに板書に残す。そのことによって、一人一人の思いが分かり、友達と交流し、多様な考えが認め合える学習の場になると考えた。

## ５　実践事例

（１）　主題名　相手の立場に立って〈第５学年　２－（４）謙虚・寛容〉

（２）　資料名　「すれちがい」

（３）　ねらい

・広い心をもって、相手の立場を考え、お互いに気持ちを分かり合おうとする心情を育てる。

・お互いの考えを交流することで、自分の考えを深めることができる。

（４）　展開

| | 学習活動（主な発問と予想される児童の反応） | ・指導上の留意点、〇評価の視点 |
|---|---|---|
| 導入 | １　友達とけんかをしたときのことを思いだし発表する。 | ・資料への方向付けを行なう。 |
| 展開前段 | ２　資料「よし子の日記」と「えり子の日記」を読んで話し合う<br>（日記を読んで思ったことなどを言いましょう。）<br>①よし子、えり子になったつもりで、お互いに言いたいことを言い合いましょう。<br>〈よし子〉<br>・　自分から約束したのにひどい。絶対に許さない。<br>・　約束を破ったのだから、許してあげないのは当然だ。<br>・　怒りすぎたかな。理由を聞いてあげてもよかったかも。<br>〈えり子〉<br>・　理由ぐらい聞いてくれてもいいのに。<br>・　こっちにも理由があるんだから勝手に怒らないでよ。<br>・　もう少していねいにあやまってもよかったかも。<br>（両者の事情について担任が説明するのを聞く）<br>②<u>2 人がけんかをしないためには、どうすればよかったのでしょう。</u><br>・　よし子さんは、そんなに怒らないでえり子さんの話を聞けばよかった。<br>・　えり子さんは、よし子さんに分かってもらえるまで話せばよかった。<br>・　お互いが相手のことを理解しようとする気持ちをもって話せばよかった。 | ・児童を 2 つの教室に分け、それぞれの日記を範読する。<br>自分のよさがわかり、より高めようとするための工夫<br>【②（ア）】　課題設定<br>友達のよさを自分にも生かそうとするための工夫<br>【①（イ）】　役割演技<br>・よし子とえり子の言い分を、よし子側・えり子側から出させ、二人の心情に迫る。<br>・見ていた児童にも、どのように感じたかを発表させる。<br>〇よし子、えり子の気持ちに共感することができたか。<br>・すれちがいや過ちは誰にでもあるものなので、どういった心で接するべきなのか考えさせる。<br>〇相手の過ちをゆるそうとする気持ちに気付くことができたか。 |
| 展開後段 | ３　今までの自分をふりかえる。<br>〇この 2 人のように、友達のことをゆるしてあげたこと、ゆるしてもらったことがあると思います。そのときのことを思い出してください。<br>・　遊ぶ約束をやぶられたけど、友達が心をこめてあやまってくれたから許してあげた。<br>・　遊んでいたときにぶつかり、痛い思いをさせてしまったけど、わざとじゃないことを言って許してもらった。 | ・ワークシートに記入させる。<br>・自分のことをじっくりと振り返れるように時間をとる。<br>〇自分のことをふりかえることができたか。 |
| 終末 | ４　教師の話を聞く<br>５　授業の自己評価をする | 自分のよさがわかり、より高めようとするための工夫<br>【④（イ）】　自己評価 |

（５）評価

・　広い心をもって、相手の立場を考え、お互いに気持ちを分かり合おうとする心情がもてたか。

・　友達同士考えの交流をすることで、自分の考えを深めることができた。

## 6　考察

### （1）　自分のよさが分かり、より高めようとするための工夫

ア　資料

本時では、学級を 2 グループに分け別々に資料を読んだことで、児童から多様な意見を引き出すことができ、人物の気持ちについて深く考えることができた。

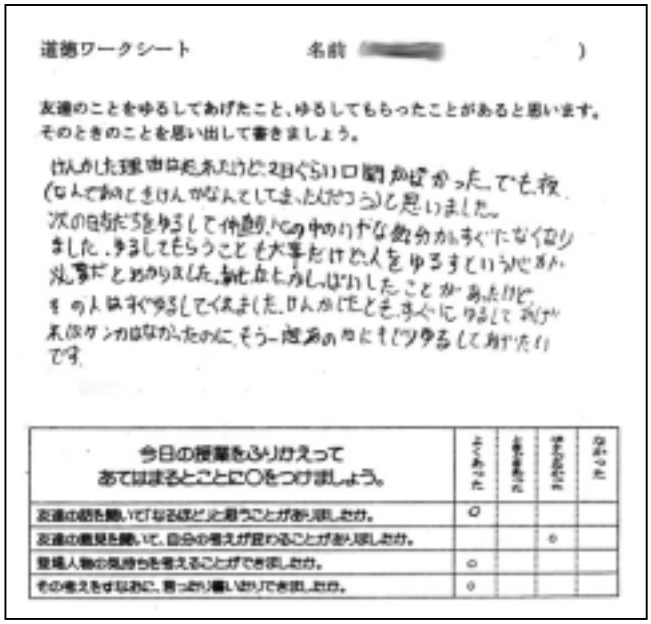
イ　発問

児童から出された資料の感想を生かしながら授業を展開することで、自分の思いを話すことや、友達の考えに触れることができた。また、どの子も意欲的に学習に取り組むことができた。

ウ　事前評価

事前の意識調査を行うことで、児童が本時の価値をどのように把握しているのかをつかむことができた。また、意識調査でとらえた結果を、価値のとらえ方が偏らないようなグループ分けや、多様な考えを引き出すような意図的指名に生かした。

「自己理解・他者理解」に関する意識調査で、自分を見つめることや、考えを表現することに苦手な意識をもっている児童を把握することができ、授業中に発表をうながすよう声をかけることができた。



道徳ワークシート　　名前 [redacted] )

友達のことをゆるしてあげたこと、ゆるしてもらったことがあると思います。
そのときのことを思い出して書きましょう。

けんかした理由は忘れたけど2日ぐらい口聞かなかった。でも夜
(なんであんなことでけんかなんてしてまったんだろう)と思いました。
次の日友だちをゆるして仲直りの中のりな感分がすぐになくなりました。ゆるしてもらうことを大事だけど人をゆるすというのが大事だとわかりました。新しく友だちがしばらくしたことがあったけど
その人はすぐゆるしてくれました。けんかしたとき、すぐにゆるしてあげれば良かったのに、そう一度あのときにもどってゆるしてあげたいです。

| 今日の授業をふりかえって あてはまることに○をつけましょう。 | そう思った | 思った | まあまあ思った | 思わなかった |
|---|---|---|---|---|
| 友達の話を聞いて「なるほど」と思うことがありましたか。 | ○ | | | |
| 友達の意見を聞いて、自分の考えが広がることがありましたか。 | | | ○ | |
| 登場人物の気持ちを考えることができましたか。 | ○ | | | |
| その考えをすぐ近くに、書いたり書いたりできましたか。 | ○ | | | |

エ　自己評価

事前の評価と、授業後の評価を比較することで、人をゆるすという気持ちがより深まるなど、児童の価値に対する意識の変容を見取ることができた。また、長期間にわたって自己評価を行ったことで道徳の時間に対する児童の意欲が高まった。

### （2）　友達のよさを自分にも生かそうとするための工夫

ア　話合い

全員の前で発表する前に、二人組みなどで話合うことで、発言しやすくなった。

役割演技を行うことで、自分の思いを素直に語ることができ、その後の話合いがより深いものになった。

イ　板書

名前のカードを活用することで、発言が一層活発になった。児童の発言を黒板に書き残すのに時間がかかるので、授業の流れがその間止まってしまうことがある。さらに工夫が必要である。

## Ⅵ　研究の成果と課題

### １　研究の成果

**(1)　自己理解のための工夫について**

ア　資料

○　児童が身近に感じたり、感動したりすることのできる資料を選択することにより、登場人物になりきって考えたり、多様な考えを引き出したりすることができた。

○　資料提示を工夫したことで、児童が資料の中に引き込まれ深く考えることができた。

イ　実態調査

○　事前の実態調査で児童の実態を把握した。それに基づいた児童一人一人のねらいを設定したことで、一人一人の変容をとらえることが容易になり、それに応じた支援につながった。

ウ　発問

○　ねらいがはっきりと示されるような中心発問を設定したことで、道徳的価値に迫ることができた。

○　児童の発言やつぶやきをもとに、その心情に深く切り込む補助発問を行ったことで、児童の考えが深まった。

エ　ワークシート

○　ワークシートに記入する活動をしたことで、児童は自分自身についてしっかりと振り返ることができた。また、自分自身の心の状態を見つめることで、自己評価にもつながった。

**(2)　他者理解のための工夫について**

ア　話合い

○　児童の実態に応じた話し合いの形態を工夫したことで、多様な考えを引き出すことができた。

○　動作化や役割演技を取り入れたことで、児童の思いが素直に表現され、考えを深めることにつながった。

イ　板書

○　一人一人の発言を大切にし、板書に生かしたことで発言が活発になった。また、他の人の思いが目に見え、自分と比べながら考えることができた。

### ２　今後の課題

(1)　自分を見つめさせるための工夫について

一人一人の児童の実態に応じたねらいの設定、ねらいに応じたきめ細かい支援をさらに工夫していく必要がある。

児童の考えがより一層深まるような補助発問について今後も研究していく必要がある。

(2)　友達と交流するための工夫

話し合い活動がより一層活発になるために、学習形態や話合いの進め方などに工夫していく必要がある。

# 平成１６年度　教育研究員名簿（　小学校・道徳　）

| | 区市町村名 | 学校名 | 氏　　名 |
|---|---|---|---|
| 低学年分科会 | 中野区 | 新山小学校 | ○新井　澄子 |
| | 品川区 | 御殿山小学校 | 沖　夏 |
| | 目黒区 | 五本木小学校 | 船越　恵理子 |
| | 葛飾区 | 東水元小学校 | 吉田　初生 |
| | 江戸川区 | 船堀小学校 | 市川　宏美 |
| | 青梅市 | 若草小学校 | 黒澤　敦史 |
| | 小金井市 | 小金井第一小学校 | 加藤　苗子 |
| | 国立市 | 国立第二小学校 | 杉田　静子 |
| 中学年分科会 | 杉並区 | 富士見丘小学校 | ○甚野　雄治 |
| | 足立区 | 東綾瀬小学校 | 田中　博 |
| | 日野市 | 平山台小学校 | 百田　明弘 |
| | 中央区 | 城東小学校 | 新井　民枝 |
| | 墨田区 | 東吾嬬小学校 | 佐野　智子 |
| | 武蔵村山市 | 第三小学校 | 田上　由紀子 |
| | 練馬区 | 大泉学園小学校 | ○長谷部　雄大 |
| | 板橋区 | 新河岸小学校 | 松島　夕紀子 |
| | 台東区 | 蔵前小学校 | 藤澤　隆惠 |
| | 江東区 | 第五砂町小学校 | 兵頭　智子 |
| | 小平市 | 上宿小学校 | 前川　恵里 |
| 高学年分科会 | 渋谷区 | 富谷小学校 | ◎井上　央 |
| | 町田市 | 三輪小学校 | ○折茂　慎一郎 |
| | 世田谷区 | 等々力小学校 | 工藤　統 |
| | 荒川区 | 大門小学校 | 清水　拓也 |
| | 府中市 | 小柳小学校 | 今宮　直樹 |

◎世話人　○副世話人

担当　東京都教職員研修センター指導主事　二瓶　正男
指導主事　松井　彩


平成１６年度教育研究員研究報告書

東京都教育委員会印刷物登録
平成１６年度　第２１号
（東京都教育委員会主要刊行物）

平成１７年１月２４日

編集・発行　東京都教職員研修センター
所在地　東京都目黒区目黒１－１－１４

電話番号　０３－５４３４－１９７４

印刷会社名　鮮明堂印刷株式会社